

インプロを体験してみよう！ —Give your partner a good time!—

仙石桂子 ・ Gehrtz 三隅友子
(四国学院大学) ・ (徳島大学教養教育院)

1. インプロの学びとは

近年の「アクティブ・ラーニング」や「主体的・対話的で深い学び」といった、学習者が能動的に、また相互にかかわり合う教育の方法が推進されている。渡辺(2020)も「学びを、より生き生きとした、より深いものにするために、演劇的手法を広く教育活動へ取り入れてみよう」と呼びかけている。普段教室や劇場内で行われている演劇的手法を用いたワークショップやグループワークはまさに「実技系」である。ただし、コロナ感染症と付き合いながらの現状では演劇的手法を何も制約のないまま行うのは難しい。即興演劇(以下インプロと呼ぶ)は、その場の状況・相手にすばやく柔軟に反応し、仲間と共通のストーリーを作り、直観的知識(体験に対する反応が直感レベルで起こる時、制限の多い知的レベルを越えて個人が活動する時に得る知識)に達するための手段である。つまり、インプロは毎回何が起きるかはその場でしか分からず、自然発生的に起きることを重視するため、接触シーンも否定できない。

2. 演劇的知とは

安田(2007)は「演劇的知」を次のように三つに分け、「一、個体としての**身体**に気づく教養。二、生活している**社会**に気づく教養。三、歴史の中に**生きている**ことに気づく教養。」としている。演劇的手法を活用した学びは、単なる知識のやりとりといった一面で捉えるのではない。ことばに支えられる知識のみならず、演劇的知を使い**学びを全身化**しながら、その後に「なってみる学びから得る知識」を自ら気づき獲得するものである。自らの身体と声を使い、向き合う他者のそれらを受けとめながら演じることは、日常から離れた想像できない自分に対する新たな気づき(無意識であった自分の深いところにある感情や情動を意識する過程)を促すこともある。さらに日常で例

えば、教師を演じている自分に気づくこと、そこから演じている自分を観客の視点からの捉え直しを体験してみることも、演劇的知の目指すものとする。

3. 演劇的知を取り入れる可能性

発表者らは(各々専門は演劇教育と日本語教育)は、現在演劇的知を使った教育活動を行っている。大学にて日本人学生・留学生・一般を対象にミニドラマの作成と上演といった、演劇活動の実践である。本ワークショップでは、インプロの中でもCROW(登場人物・関係性・目的・場所)を決めて演じることにより、「演劇的知とは何か？」を参加者で共有する。アイスブレイクに始まり、物語づくりから自分とは別の役割を演じる、すなわち「なってみる」ことを体験する。この体験を通して、特に今年度はキース・ジョンストンの言葉「Give your partner a good time? (相手に良い時間・瞬間を与える)」を検証したい。教員・職員・学生・学習に関心のある一般等の参加を期待する。

＜特に2020-22年はオンラインにて実施した本ワークショップを今年是对面にて実施する。＞

参考文献：

- ・渡辺貴裕/藤原由香里「なってみる学び-演劇的手法で変わる授業と学校-」2020 時事通信社
- ・安田雅弘「思想」2007 5月 岩波書店
- ・高尾隆/中原淳「インプロする組織-予定調和を超え、日常をゆさぶる-」2012 三省堂

参考動画：十六地蔵物語」

・オンライン演劇 2021：

https://youtu.be/u8lad31K7Po?si=qY86iL_PLLU-oNuT

・朗読劇 2022

<https://youtu.be/Y8LLsknQ1Jk?si=QwOypqa5Svvnv4wG->

資料: インプロヴィゼーションとキース・ジョンストン

インプロとは？

＜英語のインプロヴィゼーション（improvisation：即興）という詞が省略されてできた言葉。俳優たちが脚本も、設定も、役も何も決まっていな中で、その場で出てきたアイデアを受け入れ合い、ふくらませながら、物語をつくり、シーンをつくっていく演劇である。＞

1. ジョンストンについて

1933年イギリス南部のブリクサムで生まれる。11歳の時に文字や数字を記憶することが困難になり、学校に適応できなくなる。図書館での独学の後18歳でロンドンに出て、美術教師となる。赴任先の小学校で問題児の学級を担当し適応できないとされる子供たちに驚くべき能力を発見する。その後、知り合いの紹介で戯曲の執筆に関わる。劇作家グループの非生産的な議論をよそに、議論よりも実際に演じてみることを行い、これがインプロとなった。演劇学校での指導の中で授業を超えて稽古場での参加者の笑いと面白さがインプロ劇団を作るまでになる。世界各地でインプロを教えながら、活動の場をカナダへと移しカルガリー大学を経て、インプロの創始者として、開発したゲーム、エクササイズ等をもとに現在でも世界でワークショップを行っている。

2. ジョンストンのインプロの方法論 と 3. ジョンストンの教え方の特徴

大人を「萎縮した子ども」と考え、そもそもすべての人がもっている創造性をよみがえらせることを目指す。この創造性の中で、自然発生(spontaneity)と想像(imagination)の二つのキーワードを用いる。大人になると自然発生は、社会的こころ(Social mind)によって抑制されてしまう。以下にあげる恐れが自然発生を抑えるとしている。

①失敗への恐れ ②評価への恐れ ③未来・変化への恐れ ④見られることへの恐れ

これらの抑制に対応するために、ジョンストンは「ふつうにやる・がんばらない・独創的にならない・あたりまえのことをする・賢くならない・勝とうとしない・自分を責めない・想像の責任を取らない」と言う。検閲が奥に引っ込む。

4. ゲームの例 (さしすせそ禁止ゲーム/ワンワード/次、何をしますか?)

5. 教えるときの工夫 と 6. 学び場作り

①カリキュラム ②教師の態度 ③教師と生徒の権力関係 ④段階の進め方 ⑤逆の教え方

7 ジョンストンの本

・ Impro: Improvisation and the Theatre (1979) ・ Impro for Storytellers (1999)

＜まとめ＞ インプロとは

主目的： 人がもともともっている創造性や表現力を引き出す

理論の特徴： 自由な創造性や表現力を検閲する恐怖をなくしていく

方法論の特徴： ゲームを中心として、ストレスのない学びの空間で学ぶ